

小林 知、『カンボジア村落世界の再生』
京都大学学術出版会，2011 年，vi+528 p.

宮沢千尋*

本書は、ポル・ポト時代以降のカンボジア農村の地域社会の変容と、そこに暮らす人々の生活世界に関する民族誌である (p. 3). 著者はカンボジア中央部のトンレサップ湖の東岸地域の一村を中心、2000 年から 2002 年にかけて住み込み調査を実施し、1970 年に始まる内戦とその後のポル・ポト政権による支配がどのような変化を地域社会にもたらし、そこに生きる人々がその変化にいかに対処してきたのかを考察している。

本書については、既にカンボジア研究の視点から高橋美和氏による書評が『東南アジア研究』に掲載されているし、日本文化人類学会、東南アジア学会などの学術誌においても書評が掲載される予定と聞く。それだけ、本書の内容がもつインパクトが大きいからであると評者は納得するのである。

本書は大きく分けて 4 部構成になっている。序論として、第 1 章「カンボジア農村社会研究の視角と方法」、第 2 章「カンボジア社会と調査地域の概況」がある。その後、具体的な叙述が第 1 部から第 3 部にわたって展開されている。

第 1 部は「再生の具体的歴史を読み解く」と題され、ポル・ポト時代以後の地域社会の歴史的経験の分析を目的とする。第 3 章「集落の形成、解体、再編」、第 4 章「農地所有

の編制過程」からなる。

第 2 部は「地域生活の基盤を探る」である。ポル・ポト政権の支配が地域社会でどのように経験されたのかを、事実発見を重視する視点から掘り起し考察することに主眼が置かれている。第 5 章「生業活動と家計の実態」、第 6 章の「経済格差の再現」からなる。

第 3 部は「生活世界の動態に迫る」である。第 1 部の歴史過程と第 2 部の現状分析を踏まえながら、ポル・ポト時代以後に再生した地域社会のなかで人々が多様な理念と現実を生きている様子を考察している。特に文化再編に関する領域のなかで、宗教活動を取り上げる。第 7 章「宗教実践の変化と民族的言辞」、第 8 章「仏教実践の多様性と変容」、第 9 章「寺院建造物の再建」、第 10 章「結論」という構成になっている。

本書の貢献については数多くの点が挙げられるが、紙数の関係もあり特に評者が注目する三点について述べたい。

第一点は、著者も目的として挙げているように、カンボジア研究がこれまでおこなってきたステレオタイプの叙述や立論を、フィールド・ワークから得た情報を分析することによって乗り越えたことである。

具体的に著者の批判の対象となるのは、ポル・ポト時代とそれ以降のカンボジアの特徴を「内戦」「虐殺」「飢餓」としてのみ捉え、その文化的特徴を論ずるような研究である。また、そうした研究にとって、カンボジアの文化的特徴を語る際の根拠となっている人類学者メイ・エビハラによる、文化規範に言及する研究である。これらは「生活の文脈から

* 南山大学人文学部

離れた思考空間でしか意味をもたない仮説を実体化させ、二項対立的な文化モデルの鋳型にそれをあてはめることでカンボジアの人々の行動が理解できたと述べてきた」わけである (p. 490)。

著者は、①ボル・ポト時代の以前と以後という時間の区切りが、カンボジア農村に生きる人々にとって過去対照軸のひとつでしかないこと、②ボル・ポト時代の婚姻は、革命組織が婚姻を準備したのであるが、相手の選択に関しては親の意向が働く場合があったこと、すなわち生活のなかに交渉の余地が残されていた場合があること、などを示すことによって、こうしたステレオタイプの叙述に対し反論を加えた。

第二点は、フィールド・ワークを通じて、従来知られていなかった、カンボジア人が農村地域で生活していくうえでの自己と他者を認識する概念、すなわち民俗分類概念を発見し、記述・分析したことである。それらは多くが、経済格差を参照点としたいいくつかの対比的概念であり、多層構造になっている。「金持ち／貧乏人」「稲田の人／市場の人、都会の人」などが、人々を分別するカテゴリーである。

とりわけ興味深いのは、民族的な言辞である「チェン（中国人）／クマエ（クメール人）」の差異である。VL 村は、村が開かれたところに住んでいた「草分け夫婦」に中国からの移住者やその子孫が多く、系譜上は全ての村人が「チェン」と呼ばれる可能性をもっていた。しかし調査時点においては、中国的な宗教行為の有無と「チェン／クマエ」の弁

別という村人の意見には、何の根拠も無かった。むしろ、中国人、中国人である祖先、それらの人々が伝えた文化的伝統という以外の第 3 の意味に著者は気づいた。それが、経済的指標を参照点とした「他者への名指しとしてのチェン」である。つまり、金持ちの金貸しを「チェンだ」とし、実際の貸金以上の額の返済を借り手に求める金貸しを「これがチェンのやり方だ」と非難するような場合である。無論、そこにはエスニックな根拠などない。スロックルーと呼ばれるトンレサップ湖の増水域に位置し商業活動が盛んでない地域の村人からは、VL 村のあるサンコー区中心部の人々は「すべてチェンだ」と語られ、逆にサンコー区中心部の人々によって、スロックルーの人々がひとまとめに「クマエだ」と語られる。著者は、このような文脈で「チェン／クマエ」の区別が人々に使用されるのは、①サンコー区中心部に住む富裕な人々の経済行為が、中国人移民の行動が作りあげた「チェン」の生業活動に関するステレオタイプと重なる特徴をもっている、②サンコー区内の市場に近い村と遠い村、あるいは同一村落内の富裕世帯と貧困世帯のあいだといったかたちで、入れ子型の空間的構造が人々のアイデンティフィケーションを支えているからだとしている。卓見である。

第三点は、第一点のステレオタイプへの反論とも関連するが、これもメイ・エビハラの研究にみられるような古典的コミュニティ・スタディを乗り越えた点である。エビハラの研究では、一村落の範囲内のみではなく、人々の生活が外部へと広がっていること

を意識しながらも、社会活動・経済活動・宗教生活などに関して、村落と外の世界とのつながりに言及することがほとんどなかった。これに対し著者はVL村だけでなく、広くサンコー区でフィールド・ワークをおこなってデータを集め、生活面の諸側面でコミュニティをかたちづくるという人々の生活世界の動態を分析している。この点が本書の最もダイナミックな点であり、読んでいて知的好奇心をかきたてられる点である。

第6章で、この点が十二分に展開されている。すなわち、6-1「生業活動の時代的変遷」では、ボル・ポト政権崩壊後に帰村したVL村の人々が、早くも1979年に「自転車キャラバン」でタイに行き貴金属と交換で消費物資を仕入れ、それをコンポンチャーム州やプノンペンまで自転車で運び売りさばくという経済行為をおこなっていたことが示される。6-2「世帯間の経済格差」では、VL村富裕層の分析があり、それに該当するCT氏やNgL氏がプノンペンでの商売の経験を持ち、取引関係において村外と密接な関係をもっていることが示される。6-3「村落間の経済構造」では、VL村の富裕層の生業活動の実態を理解するために、サンコー区全体の社会経済的構造との関連に言及する。VL村が国道沿いに位置した村のひとつであるのに対し、サンコー区の村落のなかにはこれと地理的条件が異なるトンレサープ湖の増水域に近い村落があり、生業活動の差異がみられる。著者は増水域に近い村落のひとつであるPA村でも調査をおこない、生態的環境や道路へのアクセスに生業が影響を受け、VL村

との経済格差がおこっていることを示した。さらにサンコー区の14村落で予備調査の段階においておこなわれた、結婚式の祝宴に出席する際の祝儀の金額に対する回答を用い、各村落の経済格差を浮き彫りにする。

次に本書の問題点について述べる。それは、村落を村落、すなわちコミュニティたらしめているものとは何かがわからないということである。著者は「農村に暮らす人々の生活におけるもっとも基本的なアイデンティティの拠り所がプームにある」(iv)とする。しかし、そのことに関する調査地域での具体的な記述と分析は無い。VL村の人々による「自らのプーム」に対する愛着や、プームが自分たちのアイデンティティに関わる重要な存在であるとの語りが、本文中にはみられない。ボル・ポト時代に強制移住させられていた人々が、1979年の同政権崩壊後、VL村に戻ってきたという記述はある。しかし、そのことがVL村というプームを「生活におけるもっとも基本的な存在」と人々が考えていることの証拠にはならない。

評者が推測するに、制度的に設定された「村」という単位の領域内で地縁的な愛着の感情が、何がしかの共同性を産むことはありうる。しかし、本書においては、行政制度的な側面の歴史も十分に展開されているとは思えない。「歴史を重視する」としているのに、最も資料が残っていそうなフランス植民地時代の行政制度に関する記述や、フランス行政官や研究者によるカンボジア村落研究に関する記述は皆無である。

もちろんベトナムと違い、フランス植民地

機構はカンボジアの村落に対して無関心であったかもしれない。ベトナムにおいてフランス植民地当局がおこなったような村落慣習調査はおこなわれず、村の歴史や生活に関する記録の提出を求めることも無かったかもしれない。また、行政文書も区や村落のレベルまでは残されていないのかもしれない。

しかし、繰り返しになるが、著者は VL 村を単位としてカンボジア農村を記述し分析しようとしているのに、その村のまとまりがみえてこないのである。仏教寺院は、村落の結節点にはなりえない。本文中の記述でもわかるように、VL 村には仏教寺が無く、村人は同じサンコー区の SK 寺と PA 寺の活動に参加している。この場合にも、どちらか一方の寺を排他的に選ぶ村人は、ごく少数であった。著者もいうように「地元住民とある寺院の結びつきを村落単位で示すことは（中略）現実をそのまま伝えるものではない」「ある寺院を支持するといった形で、寺院と村落の関係を直接的に対応させることは困難」（いずれも p. 387, 注 5）である。

日本やベトナム村落のような明確な成員権が無く、村を範囲とした祭祀圏も無いというなら、それはそれでよい。いずれにせよ著者の記述だけでは、カンボジアの村が、そこに住む人々にとってどのような意味をもつかがわからない。これでは、村という分析範囲の設定も、著者が批判の対象としている「ステロタイプに基づいたカンボジア研究」の限界を超えることができていないのではないかという疑念が浮かぶ。

一方で、結論の直前の第 9 章になって初

めて叙述が始まる、寺院建造物の再建についての寺院共同体の議論は、本書におけるカンボジアの農村地域に関しての唯一の共同体に関する具体的記述であり、注目を惹く。村落＝コミュニティという既存の枠組みに固執せず、いっそのこと寺院共同体を分析の中心に据えてみたならば、全く新しいカンボジアのコミュニティ・スタディが描けたのではないだろうか。

しかし、以上のような点があったとしても、本書に示された著者の研究の価値はいささかも否定されるべきものではない。

大学院時代、著者は「ドンデーン村プロジェクト」を自分の目標とする研究として、研鑽を積まれたという。著者の業績には及びもつかないが、評者も同じく同プロジェクトを大学院博士課程時代に読み、大きな影響を受けたひとりである。本書は、著者が希望するように、ドンデーン村のモノグラフと同様に、長く読み継がれる書物であると確信する。

上田 元. 『山の民の地域システムータンザニア農村の場所・世帯・共同性』東北大学出版会, 2011 年, xvi+432 p.

佐藤廉也 *

アフリカで調査にたずさわる多くの地域研究者にとって、スケール・ギャップ問題というのは切実ではないだろうか。対象が都市であれ農村であれ、アフリカのローカルな現実

* 九州大学大学院比較社会文化研究院